

【おじいちゃんの「もったいない」】

福岡県 久留米信愛中学校

三年 上田 咲音

「水がもったいないやろ。」

これは数年前同居していた祖父の口癖だ。私が顔を洗ったり手を洗ったりと水を使うところを見つけると必ず言ってくる。私はそれがなんだか貧乏くさいような気がして、嫌でたまらなかった。水の使いすぎがいけないのはわかっている。でも、私の行動一つ一つにもったいないと注意されると、「わかったよ」と嫌気がさしてしまった。

ある、まぶしいほど日差しが強い夏の日、私は暑くてたまらなくて、また水を出しっぱなしにしたまま手や顔を冷やして涼んでいた。すると、その私が出しっぱなしにしているところに祖父が来てしまい「水がもったいないやないか」と怒られた。私はその言い方が気に食わず、「なんでおじいちゃんはそのなにももったいないもって言うの。」と大きな声を出してしまった。すると祖父が「こっちは来い」と言ってリビングまで呼んだ。

「五人の庄屋って話を知ってるか。」と祖父が話し出した。祖父の話によると、私が住むうきは市では約二百年前、筑後川がすぐそばに流れているのにもかかわらず、上流の村が水をせき止めてしまい、下流の村には水が届かず、農業ができなくなってしまったそうだ。その時に立ち上がったのが、五人の庄屋たちだったという。興味を持ち始めた私に、祖父は淡々と話しを続けた。五人の庄屋は村人たちのために、何度も上流の村の交渉を重ねた。しかしすぐには理解されず、厳しい言葉を浴びせられることもあったそうだ。それでもあきらめずに交渉を続け、やがて水が下流にも届くようになり、田畑は息を吹き返し、人々の暮らしも豊かになっていった。祖父は、「当たり前のように誰かの努力がある」と言った。五人の庄屋の行動は、ただ水を取り戻すことが目的ではなく、争いをなくし、みんなが生きていけるようにするための知恵と覚悟だっ

たのだという。そして最後に祖父はこう言った。「おれが水がもったいないって言う理由、少しはわかったか。」

私は、それまで何気なく使ってきた水が、昔たくさんの人の努力によって守られてきたものだと思い、何か申し訳ない気持ちになった。そして祖父の口癖がようやく納得できたような気がして、自分も変わらなないといけないと思った。二百年も前の話だけど、この五人の庄屋がいなければ、今のうきは市なかったかもしれない。わかったつもりだったけれど本当は何もわかっていなかったのだ。水を無駄にしないこと。それは節約のためだけではなく、昔の人たちが命がけで守ろうとした「分け合う心」を今に伝えるためでもある。今、私が当たり前のように使っている水には、そんな歴史が流れている。

あの日以来、私は水を使うとき、自然と蛇口をしめるようになった。祖父の「もったいない」という言葉が、うるさいだけの口癖から、大切な教えに変わったのだ。今、祖父は施設に入っているが、水を使うとき、祖父の「水がもったいないやろ」という言葉がふと頭に思い浮かぶ。これからの人生のためにもこの「もったいない」という気持ちを忘れずにいたいと思う。